10寛政八年『花供養』

底本　白鹿　校異　某家本

花供養

（表紙・題簽）

（表紙見返し）

東山の花ざかりなる頃、双林樹下の
席上をふさぐに吟声天地に響
きけるにや、猿は桜をかざして
南無庵を繞り、鳥は花を含
んでばせを堂に落つ。嗚呼、
花供養の時なる哉

寛政丙辰弥生十二日　　加賀　蒼虬

（序オ）

百韻一巡

笠ぬぎて遠方の桜を捧（ママ）ばや　兎仙
戸帳を揚る袖の陽炎　闌更
じが〳〵と鳴つゝ蜂の巣に込て　瓜坊
川のうへなる塵塚の塵　子良
ゆきつきつ千里の人の歩にさゝれ　白黛
にぎはへる代の粟給ひけり　月峰
八朔はきのふに移る月細し　百池
露の円座を打かさね置　芦涯

（序ウ）

島守の茶をつたへたる徒然に　士卯

　文とり添し鶴の片股　江蓼

花きそふ菖蒲に祭る弓矢神　応美

　ひとりの外はみな娘なり　平呑

長持も覃笥も船の通ひよく　兎夕

　袱子ほどく赤石の上　杜桂

五七年有髪と成て隠れける　桃李

　わが細工には出来ぬ烏糸欄　松蒼

更て行月の桂に雲かゝり　北華

夜啼ものゝからびたる秋　古塘
磐手野の関の生壁身に入て　其成
木履はく日は春も静けき　木貞
花散て眠れる亀の背に乾き　花縣
種子の俵の口ほどき置　不犲

ウ

うつし居る赤飯にほふ火のいりて　亜渓
かざりし馬の軒にいなゝく　芹水
夕顔の影もゆかりのあればこそ　羅城
記念ひろげて泪かけつゝ　馿丹

巖端に寄せては帰る沖つ波　騏六
翰翁天堂を松覆ひたり　志諺
令落て故郷人に袖しのぶ　墨古
紙結びしは誰道のため　紫甲
あやしくも時雨の中に灯のともれ　唇風
雀となりし実方の夢　破衣
たゝかれて久敷閉る戸を開き　鸞台
詩よみのむづかしき世や　南涯
信濃路の行ゑ定し月の旅　都雀

稲葉の果を水の流るゝ　未物
一しきり風に乱れて渡り鳥　李明
障子に朝の火影消行　蒼虬
さかしげに八島の大臣舞納め　葉哨
はるかにひゞく物をとがむる　原水
年を経し供養の卒都婆文字もなく　俚尤
紛るゝ路の雪にあまさえ　古光
楼に誰を呼る声高き　斗流
ゐめるに疎き美人成けり　龍山
右

鬢づらに八重たつ花のうつり哉　江州水口　蜄州

松杉もめでたき花の曇かな　石部　良交

遅ざくら松風青くふく日哉　丶　亀渕

月と我只しづかなれ夜の花　水口　麹令

ちる花やちら／＼月の庭桜　丶　貫之

見ぬ花にうかれ／＼て寝ぬ夜哉　丶　一更

花に寝ぬ心はなより発りけり　石部　蛙玉

月やあらん花にばせをの光かな　丶　阿山

雨の日の花重たげに散にけり　水口　好女

三井寺の花に狂女の沙汰もなし　丶大津　井子
下嵯峨や葩よどむすて筏　カタ丶　一枝
雨雲や来ぬ人憎し家桜　丶　一之
おらすなよ花に手の出る垣隣　丶　自笑
朧夜にいとゞ静けし花一木　丶　故夏
花の雲上は梵王帝釈天　草津　可能
鳥はいり雲はされども花の本　丶　月桂
花曇はれて嵐のうき世哉　丶長ハマ　此得
是ほども能あてがひや山ざくら　丶　桃峰

花曇茶屋に取付く山路哉　丶　芦調

山ざくら橋投かけて参らせん　西湖万木　素更

山里の煙や花の雲に添ふ　丶　東嶺

此頃や吉野ゝ花の夢をみる　ヒコネ　水石

咲つゞく中に一木の遅ざくら　丶信楽長野　山鳥

蝶もあひ似たりといはん花盛　丶海津　其月

小夜半や嵐に花のすれる音　丶小笹原　古音

近よれば寄るほど花の匂ひ哉　丶高島　文山

けふも花に美しう世を遁けり　丶万木里　北嶺

あしにまかす心のたけや花の山　　丶八マン　　契之
峰は雪麓は霞比良の花　　丶清水鼻　　熊谷
遅桜をそくて風にのがれけり　　丶山上　　鷺橋
ちらさじと手向る花の一枝哉　　丶　　紫甲
白きより夜の桜と成にけり　　丶伴ノ谷　　当令
不足なき其夕暮を桜哉　　丶大塚　　吾人
妙なるや千手千眼山ざくら　　丶八幡　　麦花
柴折て肴はさむや山ざくら　　丶八日市如来村　　何楽
羽二重に置手拭やさくらがり　　丶霜降村　　其岩

（四ウ）

よきほどに都ぞむくや花のぬし　ヽ西太田村　瑳雀

隣から来た枝もあり花ざかり　ヽ坊村　蓮車

今も花むかしも花の忌日かな　ヽ平松　亜渓

月の桜ある夜寝覚て心澄む　加州金沢　松菊

磯近き花に女子の渡し哉　蛙井

酔さめて淋しき花ぞ誠なれ　ヽ　蘭尾

隔とも是なわすれそ花の友　ヽ宮ノコシ　竹之坊

沖の帆のさくらに透る板家哉　ヽ才川　松華

月に泣人よ桜に高わらひ　丶津幡　風逸
花山や常より早き朝ぼらけ　金沢　馬仏
水音の遠ざかりけり花の山　丶　素流
船さして花に近付よすが哉　丶　南峰
夕照や鳥啼尽ぬ山ざくら　丶　李下
しづかなる陰を誠の花見哉　丶　素后
人さま／＼暮るや花の借座敷　丶　可兆
花曇棹さす船の見ゆる哉　金沢　槐路
花ざくら残の春を算へみん　丶　対山

さくら咲島をめあてか浮み舟　芦角
おく山の花もさくべき此日和　丶蘭史
花咲て幾度人に行当り　丶凸山
漣に棹もさすべき桜かな　丶馬公
人々によりて興ありさくら花　丶楚蟜
花待し世を観じ居る春の雨　丶本吉　左来
瀧音の響く深山のさくら哉　金沢　丸交
分迷ふ路もさら也山ざくら　丶百之
花ざかり夕日貫く山路哉　丶十花

（六オ）

只人も多き山路や花の暮　ヽ　因馬
ちるほどは散夕栄のさくら哉　ヽ　呉水
散花にふける心や竹ｰ把もち　ヽ　松斗
山里や花に明行馬の面　ヽ　里笑
見返れば雲と成けり山桜　ヽ　雉友
二三丁上り通せばさくら哉　ヽ　一竹
手枕に雨聞花の旅路哉　ヽ　眠和
花一木曇る桧原の奥の院　ヽ　稀才
淋しさは散すむ花の日和哉　ヽ能瀬　美水

いそのかみ経れ共／＼はつ桜　ヽ金沢　觚哉

初花や雨のあとなる汚れ道　ヽ宮ノコシ　故園

谷川や花見の時の料理屑　ヽ柏野　麦風

しゝの葉に桜散置山路哉　ヽ能瀬　怕乎

山ざくら夕べの鐘の聞へけり　ヽ　千布

八十の老をかしらの花見哉　金沢　卜木

朝曇松はかくれて花の浦　ヽ　桃脂

笠をきて行先はやし桜花　ヽ　犂松

雨の花なを分入は月の人　ヽ　兎文

下館や花の外なる笛の音　〃　車大
片里や四隣垣なし花の中　〃　一抄
手に見れば一重桜も花の雲　〃　眉山
寺はみな花の上なり東山　在京槐庵　蒼虬
大寺や桜の中の物もらひ　能州黒島　扶卜
夜の戸や有明桜薄匂ふ　〃　布遊
逢坂や車にむすぶ花の夢　〃　玻井
山影や登るに耐ぬ桜人　〃　麦秀

そゞろ気をつくらふ花の戻哉　丶　犂邑
朝馬場の桜をふるふ袂かな　丶　都山
飴売も灯ともす花の夜寒哉　丶　柳汀
負ふた子の花持ながら寝入けり　丶　馬凉
雉子啼遠山花の曇かな　丶　寄哉
桜戸に君転び寝のひと夜哉　丶　文朝
木枕の松脂くさし花の宿　丶　素玉
人過て山鳥啼けりゆふ桜　丶錦川　玉史

さし汐に海の中なる桜かな　能州三階　呉暁
雨二日いねしかひあり夕桜　ヽ　李青
思ひ出や杖にすがりてけふの花　ヽノトベ　破衣
酔さめて月に見直す桜哉　ヽ道下　誕舟
諸鳥の声やふもとの朝桜　ヽ　徂英
浮島や人も桜も夕げしき　ヽ寺口　良化
七日目は児見付たりさくら狩　ヽ道下　空花
夜桜に人を咎る乞食哉　ヽ高田　暁川
明暮にかよひしかひぞ初桜　ヽ赤蔵山　阿成

遠方の香もふけ花の川つゞき　能州田鶴浜　大牙
よぢのぼる草のかぶれや遅桜　ヽ女　蓉枝
夜桜や船ならべをくさゞれ波　ヽ　梨笑
月代に香のこぼれけり花の波　ヽ　雨ト
花の山一入月の出がてかな　ヽ　可諷
雲走る虹のひずみや夕桜　ヽ　文路
山陰や流のよどむ花曇り　ヽ　たよ女
処／＼花にそひつゝうす煙　ヽ　むゐ女

（九オ）

夜桜に鞴の風の光り哉　丶　桃川
夕陰や鳥のわけ入花ふゞき　丶　みわ女
明わたる鳥さへ花の曇哉　丶川尻　遅逸
散花や盃ひとつ流つき　丶　南甫
廿日たつ花の吹〳〵暮にけり　丶　三峡
花散や馬の顔ふる橋の上　丶　雅龍
花の雨竹の子笠に音きかん　丶　鴉明
桜ちるや小村の夜の棚霞　丶　北翠
白瀧や桜の上の日の流れ　丶七尾　李月

ちりつれる物なき花の嵐哉　丶　暮朧

只はなの源を知て山路哉　越中放生津　大酉

花の影小魚の鰭に動きけり　丶海老江　如流

山白く成行花のさかり哉　丶　白木

山もとや蝶のまぎるゝ散ざくら　丶野寺村　如行

春の月朧は花の木の間哉　丶高岡　青河

春の暮机の上に花の散　丶　壺仙

浦山や何処迄つゞく花の雲　丶今石動　史吟

雲筋に水のかぎりや遠桜　丶　文亀
登きぬ今朝雲と見し花の中　丶高岡　白雪
いかにや春をひそむ杉の戸　大旗
切きざみ乙女は桑子かしづきて　古龍
上より衣手ふき顔ふき　桃里
雨二日がくりと寒し下り月　釜朝
鴫の越来る川添ひの塀　雪
旧苑を守て糸瓜の作り取　旗

宵寝もうしと妻と酒酌　龍
なまめかし江口通ひの棹の歌　里
蛍籠売合歓の下陰　朝
帰参まつ住家の煙かつ／＼に　雪
水たてまつる暁の星　旗
凩の月あしはやき比良横川　龍
貝鐘の声冴る遠巻　里
逆さまに草鞋はく身のよるべなき　朝
暮露の本寺のふかき篁　雪

（一一オ）

破風口の霞こもりに梅柳　旗
都のたよりにせまりてやみぬ
雨の朝紅鷺啼花の林哉　ヽ高岡　大旗
舟かりて見上ん志賀の山桜　ヽ　仙芝
大和路や花に世渡る一在所　ヽ　東呉
さけば散る咲ずばいかに桜ばな　ヽ　蓼花
酒旗のあたりは深し花の雲　ヽ　魯長
きのふけふと身こそふりゆけ初桜　ヽ　一路

散花にほこる里ありをそ桜　丶　文亀
見る友に命をしほの山ざくら　丶　緑毛
はした女や外から覗く花の幕　丶　不知哉
をしや惜しと立舞袖に散桜　丶　百川
人はいさしらずや花のうかれ月　丶放生津　礒仙
山里や桜にしぶき塩ざかな　丶　白老
桜よけて吹しかいたき夜の風　丶　二翼
咲花に都こと葉も交りけり　上宮ザキ　朔宇

散花に匂ふむかしや書の上　丶　以貫
ちる花にすかし見にけり遅桜　丶　冨春
ちる花に作ひろげし田畑哉　丶　玉支
我影のうごきて月に散桜　丶　凡二

散花にあなにくの鳶や烏哉　上毛吾妻横尾　如泉
かぎろひなごく打けぶる空　丶　永白
暮の春出舟の真梶しらぬきて　丶　栄暉
摩耶が高根の鐘聞ゆなる　泉

月雪に世をわび人の侘住居　白
ふすまつゞらふ紙も歌屑　暉

右表

筆とりて桜によどむ人は誰　ヽ川原ゆ温泉　豊耕
山ふかみそなたも桜尋るか　ヽ柴村　雨夕
入船や花に棹さす人もあり　ヽ横尾　杜若
ちる花に立つすはりつ終は寝て　ヽ下仁田　竹輔
花に月欲にかぎりはなかりけり　ヽ　暁烏
夜桜に甘露もふらば草枕　ヽ島村　万戸

花ちらぬほどに風吹酒の酔　丶本宿　龍山
花おるや又来る春の気も付ず　丶　阿石
丁々と木を樵る奥や初桜　丶　長左
居ながらに老の花見や遠眼鏡　丶　春昌
人ならば初冠やはつざくら　丶　白質
人なれぬ鳥もよる枝や初桜　丶　語山
花に老花に若やぐことし哉　丶一ノ宮　羽黄

見ぬ人のあるもうき世ぞ花盛　ヽ厩橋　枕岱
吉原へ根こす桜の勢ひ哉　ヽ　士龍
ちるや桜をしき花びら川の上　ヽ　素雄
夜の桜月の出なば見ていねん　ヽ　丁峨
花手折人心なしこゝろ有　ヽ　不吸
上に見し花下に見る山路哉　ヽ　麦田
夜桜や花定らぬともし影　ヽ　麦奴
暮をしむ迄を桜の世成けり　ヽ高崎　玉芙
桜戸の七日にぎはふ日より哉　ヽ棚下　素菊

三月や花に暮ては花に明　丶横室　素己

散や桜馬のかみふる木下陰　輪雪

斯ちらば折まし物を花の枝　丶荒牧　吟水

花守の清くも華に老にけり　丶尾島　宮橋

夕虹や花より登る雨の月　丶新田亀丘　笑魚

磯山に夜の残りたる桜哉　上毛草津　鷺白

　さし来る汐に風春を吹　丶　萱菰

燕も去年の釣巣に鳴初て　丶　魚柵

八瀬のきこりの鉄漿付てけり　丶　許一
草鞋の紉解かへる夕月に　丶　涼眉
柿偸人の噓をかしき　丶　雨橋
招かれし新酒の酔の醒てみれば　丶　白英
兀てつたなき太刀の鯉口　白
鷄頭の赤括したる古ものや　菰
西門跡に黄金納めたり　柵
便なしや親に離れし六夜七日　一
遷宮の場へゆるされてけり　眉

榊葉をかざす烏帽子に月移　橘
　聞も妙なる鹿笛の声　英
秋かなし空也の痩も秋よりぞ　白
　弱き碁打を友に遊びて　菰
雨晴や谷も巌も花の雲　柵
　芽だつつ花に蛙鳴也　一
疱瘡児の赤手拭も春更て　眉
　十団子は誰が土産にせしぞや　橘
いそのかみ古きよみ歌淋しきに　英

茂りの雫かゝる碑　白

翡翠の行戻たる蓮の花　菰

馬に運びて薪売也　柵

下肴を秤にかけし山の市　一

蜜柑の籠にあまる紙屑　眉

脚病て幾日か供に出ぬ也　橘

団扇の細工酒にかへてし　英

打水の挨静る暮の月　白

声ふりわたる籠の鈴虫　菰

露寒しあしをれ鍋も世也けり　柵

ちなみ重る旅すりのきぬ　一

関守にとがめられたる夕間暮　眉

故郷の空を返り見る哉　橘

長閑くも遊べる花に興余り　菰

翅沈て寝にもどる蝶　英

道かへて入も桜の栞かな　丶　菅菰

夜桜やきけば念なき仏法僧　丶　涼眉

花の日を鶴に餌を蒔法師哉　丶　雨橘
山寺の軒に市なす花見かな　丶　許一
乗捨し駒の嘶く花の山　丶　白英
桜狩雲に濡たる思ひ有　丶　魚柵
花に貸七日が中や草の庵　丶厩橋連鼻毛石　米器
誰に花貰て折ん山ざくら　丶越樋　素栄
風もなく桜散日の思ひ哉　丶桐生　素陰
頼をくあしたの寺や初ざくら　丶　得牛
遠里や桜が中の鐘の声　丶　鷲川

寝心にひらきし明日の桜哉　一ノ騎馬　玉城
花散て柳に似たりいとざくら　ヽ関　米倉
咲初る花明日見んと寝ぬ夜哉　ヽ田雁　米艚
吹かで散桜わりなき夕かな　ヽ荒口　素関
手折られてはらりと散し桜哉　ヽ　米充
鳥飛てさかりの桜散にけり　ヽ　皎砂
見渡せば柳の空も花曇り　ヽ女屋　黄口
隣へも見せけり風の糸桜　ヽ　一尺
分入ば去年の桜の枝折哉　ヽ厩橋　素太

増花の有か／＼とさくら狩　ヽ　麦甫

花桜是は妻なき家居哉　ヽ　土卵

誰が切し黒髪ならん夕桜　ヽ木兎庵　米砂

恙なき夢の嵐や朝桜　越後高田　祖明

博労は馬のはなしや花の中　ヽ十日町　桃路

初桜星より薄く明はなれ　ヽ荒井　如蘭

雨風はきのふなりけり遅桜　尾州名古屋　羅城

花のちる跡へ廻りて薄月夜　丶清洲　騏六
雨の花はや足跡の見へにけり　丶名古屋原　方明
夕ざくら覚束なくも鳥の声　尾州　秀朶

雨の宿ぬる共借ん花の下　武州秩父吉田町　周貯
塒くむ烏からみんさくら人　丶　如圭
下戸の沙汰咄しにきかす花の山　丶　渡江
物いはぬ花に物いふ女かな　丶　兎遊
見渡せば桜／＼や谷の雪　丶　柏茂

照残す桜が本の夕かな　丶　二水

待ほどの永き日ぞをし花遊　丶　旧路

匂ふらん桜散日のよしの川　丶　秀哉

山に居て山と思はぬ花ざかり　丶　申之

これは〳〵覧に花の来る日哉　丶　芦汐

群れ来るは皆狂人ぞ花盛　丶　知蝶

ヤホの間は誰が教てゆふ桜　丶本庄　双烏

浪のこだまにかゝる春風　李明

初午の隣／＼も河漏うちて　烏
　*■とよばるゝ子の黒き也　明
月のさすかたへと人の立まはり　烏
　夕顔いくら末なりの蔓　明
蛇食ふ藪蚊に秋の窓をさし　丶
　ものいふながら鼾かゝるゝ　烏
ありがたき弓丈の御衣の香をきゝて　丶
　夜明るきはの牡丹真白き　明
小刀をわすれてもどる枕元　丶

*「月」偏「鬼」旁

楊枝こぼれし食物の中　烏
船舫ふ浅草川の薄雪に　明
冬の青葉を月か花かと　烏
売をしむ行基の筆の虫だらけ　明
山伏になる工夫するなり　烏
かた丘のあしたの原に隠れ来て　明
馬の背中にまづ風が吹　烏
花を見に一夜とめけり乳兄弟
ヽ八マン山　涼化

ちる花や汗かき給ふ面の内　ヽ　甘雨

花に虹日をくるはして暮にけり　ヽ　志考

夕桜浅十面は売るなり　ヽ秩父宮沢　文路

ちる花に胸かきあはす日暮哉　ヽ　文舎

花に宿ほしき汐見の嶺哉　ヽ本庄　李明

花の陰杉の柱もなつかしき　ヽ　双鳥

人心花になる世を野老売　ヽ熊谷　雪江

花のもとや蜂にさゝれて泣童　ヽ勅使河原　無塵

（二〇ウ）

一尺の桜世に経る担ひ売　丶　快馬
惜みつゝぬればや夢も散さくら　丶三峰山　日和良
ぬるゝをもよし家土産に花の露　丶　楚雲
ちりひぢの麓は過て峰の花　丶　洗耳
おもへとや花にさし入夕月夜　丶　可南

花やことし我髪白く眼の霞む　東都　菊明
天地のしらべもをかし花の山　丶　古鶴
見に来たる人を散さぬ桜哉　丶　武菱

酔てから噺も八重の桜かな　丶　茶暮
朝桜夢を残て見に行ん　丶　由来
水汲ば夕山ざくら雲誘ふ　丶　亘々
山ふかく散来る桜見すまさん　丶　紗言
遅ざくら青き隈よりこぼれけり　丶　春蟻
花にくれて独按摩のひとり哉　東都　成美
顔しらぬ親に逢けり花の山　丶　宗讃
よき酒は辛きにあれや散桜　丶　葛三

花の露涙は人のまよひより　丶　長翠
花に風七つ小姫が手にもふけ　丶　三千彦
散さくらよせよ返せよ鳩ぐるま　丶　巣兆
散る日からちるをさかるや花の山　丶　鳥泰
伐り木の古跡のさくら咲にけり　丶二夜庵　貞松

花鳥につかはれけらし樽拾ひ　下毛栃木　尺樹
黒谷もさくらにはやき夜明哉　足利　貞二
寺町や花に女のわらひ声　在下毛足利阿波　如臨

ちる桜舟なき川を隔けり　ヽ助戸　虚丹
座頭さへうかれきにけり花の山　ヽ梠木　橘人
住安き山家と成ぬ花七日　ヽ　灯庄
帰り来ん夕山ざくら火縄五分　ヽ　桃葉
桜戸や雉子鳴て常の暮ならず　ヽ　淡交
花ちるや鯛の鱗の八九丁　武中瀬　得之
散さくら散る花の上花の上　野州助戸　賛
はつざくら別の霜を遁れけり　ヽ　嗽石
色／＼の花の中よりはつ桜　ヽ梁田　羊石

うき雲の切て花散槙の山　ゝ足利　和井

書付て岩に言をくさくら狩　奥州仙台　露仙

おもひきや桜にもうき名取川　ゝ　露角

一日の心を花にまかせけり　ゝ　儀角

目移して一木の桜ながめあり　ゝ　和睡

海山と暮行花の驕かな　ゝ本宮　金英

咲花に何優婆塞の泣けるぞ　飛騨高山　東籬

曙やさくらに松のあけくらみ　三州矢作　幾久成

雨晴や花にしだゝる日は斜　越前敦賀　五鼎

心清し麻に通へる朝の花　羽州左沢　露橘

幾代祭山守神ぞ花の陰　丶　素風

傘さして船にたちけり山桜　遠州入野　方壺

見ぬよりも思ひ増けりよしの山　房州磯村　鳥周

花色／＼因み妬ぬ世なりけり　遠州浜松　白輅

夕花や床几はなるゝねぢ上戸　勢州　万花

風そよ／＼一重桜のはづれより　丶　杜影
散花に定家色紙の価あり　丶　瓦六
猿沢や月は隔てぬ八重ざくら　丶　菊子
うつろふや輔の上の夜の花　梅二坊
何事も無意に崩し花に酒　丶石薬師　甘谷
物とへば人の律義や山ざくら　丶三重郡山田　晴山
閑さや花ちる里のゆふ煙　丶津　楚鴻
花のちる日や西行の捨草鞋　丶　銀佮

狩暮て花ふむ履の重き也　丶雲出川　玉歩

鵜の潜あげつゝ下す花筏　丶　蘭月

山落や踏とゞまりて桜咲　丶　茶煙

池の面や日の洩る水に桜花　丶　栗花

山陰や桜にそむく家の口　丶御薗　四山

神風や浜荻の芽に散桜　子良

二見の注連を波涵す春　吾友

百千鳥もゝ近き耳聾て　万化
刀さゝねば帯もゆるまず　一事
掃跡に埃のたまる破だゝみ　友
つれなふ焦しあぶりこの飯　良
ぬれ出てそつと踊し月の夜に　事
虫鳴つゞけ糸竹の音を　化
陣幕の花に和らぐ国司哉　ヽ佃津　吾友
うつろふてから降にけり花の雨　ヽ　一事

酒に遊ぶ人雪の如し花の山　　丶柿　鹿水
ちりもせで柳の中の桜かな　　丶津　路鳥
朝夕のくらし聞けり山桜　　丶五鈴川　幹負
しる人よ我をかへさぬ山桜　　丶　花葭
愁なき高野のぼりや花盛　　丶　右竹
朝の花茶の煮返る庵哉　　丶　左柳
大和路の果の日影やちる桜　　丶　李蹊
里人の心や花にたはら橋　　丶　大貴

ふることよ花に商ふおこし米　丶朝熊岳　無牛

さき初て花の夕となりにけり　丶菩提山　青阿

灯ともせば花も朧の林かな　丶安濃津　尚道

慰とふもとり〴〵の春　丶　遙江

盆山の五色の砂の暖に　丶　知双

鳥居も軒も建替るなり　丶　万化

物くるゝ人をひたもの恋しかり　江

匂はぬ袖を禿振つゝ　道

袋だな月に皷を取出して　　化

越の城下を雁渡る声　　双

野ざくらや馬上に手折夕嵐　ヽ安濃津　烏翠

ぬるむながれの石越る音　ヽ　尚道

軒浅き住居に夏を隣るらむ　　子良

国を隔て酒もらひけり　安濃津　遙江

時行出す館鼠を月に弄び　ヽ　万化

よこたはりたる階子露けき　ヽ　雨柳

つゞくりの普請も秋は果やらず　　坐幽
夫婦中よく羨れ居る　　翠
今朝見れば開きおほせし池の蓮　　道
十方くれも過し雨ばれ　　良
供御捧ぐ布衣たゞぐさにきながして　　江
山田の市の塵に交る　　化
みだり風やましき声の蟋蟀　　柳
童落穂を拾ふ月の夜　　幽
殊更に彼岸の世並静にて　　翠

鐘鋳の煙尾上へだつる　道
手枕に長う成たる花の陰　良
見へつ隠れつ蝶現なや　江
春の磯棚なし小船漕はなれ　化
しぼり上たる楼の幕　柳
憂君のだまつて涙押のごひ　幽
別を忍ぶ雪の松かげ　翠
ぬくめ鳥また夜深きに鳴落て　道
井戸の車のきしる汐時　良

念仏する片手に虫歯痛はられ　江
　下せし金の返事さへなき　化
八丈が島といへども浮世にて　柳
　魚に木葉を籠る一蝶　道
照月の身に付衣を透通し　翠
　捨て薫りの絶し扇堕　幽
咲初る奥間所の藤ばかま　良
　筧を伝ふ堀ぬきの水　江
孝行といふ臼作る業に　化

肩のやいとのいほふ草先　柳
頃日は都鄙押なべてはな心　幽
千々のむつみを結ぶ糸遊　筆

朝日さすや花から立て花の鳥　丶西ノ田　遙江
峰の雪日に／＼消て桜かな　丶　知双
鳥さしは鳥ねらひけり花の中　丶大塚　坐幽
篝火の尽てや夜半の花戻り　丶白子　無曲

奈良坂や桜が下の鹿追ひぬ　　丶　帯川

八重山や雲のはし／＼桜ちる　　河内招提村　雪江

酔ざめの噫気味よし花の本　　丶郡づ　古光

長閑さに人みる花や奥の院　　丶　如水

白地にうら表なき桜哉　　丶楠葉　凡翁

開帳をかけて都の花見哉　　丶村野　淡水

筏組よしのは花の雪あかり　　丶　李山

行届く春や深山の遅ざくら　　丶楠葉　和水

日を惜む山に声ある桜哉　丶　一笑

したしみの落重りて夜の花　甲州浅原　真洞

朝駒の鞍静りて花の雲　丶　六珈

夜桜や膝うちぬらすこぼれ酒　丶　友生

東山や月を別て花白し　丶　南丸

御狩野の小桶の桜咲にけり　丶山ノ神　鳥語

磯寺や汐風に疾き花の色　丶　紫蘿

螺貝の出しか花のはしり咲　丶　佰洞

よき通伝や文の実にして初桜　ヽ東南胡　政尼

花守の世をわたしたる花見哉　ヽ市川　有匪

花最中しのばしき夜や月のかさ　ヽ藤田　鏡平

見ぬひまを桜かしこく散にけり　作良

古寺や花ものいはず人絶ず　ヽ　漢甫

ちる桜蝶は現に眠るかな　ヽ暮地　五雲

皆人やけふも桜に黄昏ぬ　ヽ　隣車

雲を帯て峰のしらみや桜花　ヽ　泮水

しるしらぬ人の往来や山ざくら　敬之

春を経て桜に眈る日和哉　琴水

明べき日の暮をしむ桜かな　ヽ　清父

八重霞かすみにまがふ桜哉　ヽ　豊水

花に雲に遠近山の梢かな　ヽ　梅店

　桜かざすもろこし人と連だつか
聞へ給ひしも、今十年あまりこれとて
　いひ出すべき事なければ

年／＼や桜かざして笑みもせず　ヽ小笠原　静夢

暮がてや花のひま行鳥の声　山寺　和石

山桜霞の中や人の声　丶　楚雀

野宿せんけふより我も桜人　丶小笠原　都良雄

疾植て人驚すさくら哉　丶飯野　真都良

垣ごしに花盗の笑顔かな　丶　梅五

我ありとうたふ月夜の花の陰　丶　静良

花の庵なきに事たる甚太瓶　丶鮎沢　孤山

朝風呂に遠山桜見付けり　丶古市場　美敬

傘さして来も風情やちる桜　丶平岡　如雪

不通女等も花にうかれよ酒の酔　丶　和水

ほりかけの臼に散けり山桜　ヽ谷戸　花仏

さくら見や親里訪ふて山に入　ヽ　杜月

酔人や花に五歩行五歩帰る　ヽ三沢　をしへ

鏡にはかゝらぬものか花の雲　ヽ台ヶ原　女青々

山中の花や帯売さかな売　ヽ　台眠

散にけりさくらは桜人は人　ヽ藤田　可都里

花の雲に乙女酒もる二階哉　信州佐久　柯則

見処は花にふゞきのある日哉　　文涛
翠簾影や半面美人朝桜　　文耕
漣に志賀の花散る夕べ哉　　萩露
あるは居りあるは彳さくら哉　ヽ根ノ井　胡月
ひとつちる花に口あく蛙哉　ヽ桜井　楚林
朝山やうごくが如く花の露　発地　季広
しだり桜如意輪深く在けり　今岡　胡園
聾よく吹けどさはらず桜花　ヽ七十四才　むら女
妹背山散込花の流かな　桜井　盛風

咲満し花の下枝の鳥かな　丶　如仙
朝まだき鳥啼花のはやし哉　丶　野秀
花山にいくつもほしき骸かな　塚原　宗剤
散込し花を双紙の栞哉　中居　可豊
ちる花の色漉込やよしの紙　下縣　元夢
花の日や入相の鐘に人ごゝち　丶　桃思
ちる花の鐘楼にのぼる辻風哉　丶　志考
酔さめるまでは埋めよ散桜　丶片倉　畸給
世に歴るや陵守が門のはな　丶　仙丈

山ざくら心ひらけて目にあまる　ヽ善光寺　文兆
しく／＼と身をさす花の莚かな　ヽ　希言
我まゝに留守の戸たゝく花見哉　凡化
花の戸や人を見送古行灯　ヽ　牡厚
初ざくら何うたがふて紐とかぬ　ヽ　一菫
動かせばひらく花ありはつ桜　ヽ　柳荘
山越や桜見かけて漸一里　ヽ木曽奈良井　扇之
烏飛ぶ桜の下の夜明哉　ヽ　新之
ことなるや花散さとの夕付日　ヽ　初交

黄昏や花の木の間を下る人　凡林
しがらみの花に魚飛流かな　ヽ飯田　風子
山ざくらもどりは杖の情哉　ヽ　柳枝
夜ざくらや伏ど寝られず出て歩行　ヽ　里風
水にちる花の香添ん茶のかまど　ヽ　由桜
酔伏さん芳野は花の木下闇　ヽ岩村田　岷山
桜の日暮と見しは山の陰　ヽ善光寺　猿左
花の手向酢売も袴着せ申さん　摂州池田　瓜坊

手折らずに行人ゆかし山桜　　ヽ西ノ宮　芃支
花咲や箔の落付く古仏　　ヽ伊丹　東瓦
夜ざくらは世にうつろはぬ心かな　　浪華　秀里
折るをとの我に驚く桜かな　　ヽ　蕪城
春の雁鳩共ならば花や見ん　　ヽ　詩舡
白妙に匂ひ満たる桜かな　　ヽ　素柳
花に目を泣腫したる上戸哉　　ヽ　江涯

誰が魂の遊ぶか夜の花の中　浪華　大江丸

山はさくら家は野ぐるみの煙かな　〃　画涼

ひと里ハ桜に明る夜なりけり　〃　長斎

散る花になを惜るゝ入日哉　〃　たか女

花鳥と共に狂ふや春の人　〃　泥尾

夕栄や虹吹山の花もよひ　〃　呉雪

咲みちて桜の上の曇哉　〃　梅月

夜ざくらや公家町通ふ白拍子　〃　文茎

片枝に斧のひゞきや山ざくら　〃　一炊庵

憐児不覚醜

とらへたり花盗に菓子くれん　摂州小野　君中

柴垣一重陽炎を踏み　瓜坊

緑して露干る小綱色色に　丶

鳶まだ霧もしらず顔也　中

たゞ政が月落琵琶もなかりけり　丶

秋の桜に寄る仮り殿　坊

松風の題目踊見に来れば　丶

世をさふ／＼にうしと狂ふか　中

ゆく水の水にせかるゝ恋をして　坊
　袖のわたりの雪の明ぼの　中
五位の鳥神の直宿をするからに　坊
　二日続て君に召るゝ　中
酒の香に菖蒲をしぼる比なれや　坊
　西も東も早苗とる唄　中
我世界乞食袋の面白き　坊
　月こそ本との主人成けり　中
雨雲の消て紅葉の散かゝり　坊

渋鮎下す瀧のしら糸　中

花の香を添て一たき苔の下　ヽ小野　沾節

花に曇る俤もがな春の月　ヽ　花桂

雨かほる山ざくら戸の夕べ哉　ヽ龍野　十洲

捨鳥の身をよる方や雨の花　ヽ加古川　玉屑

かんかりと月洩る花の老木哉　ヽ姫路　冨雪

ちる沙汰に鬧しうなる花見哉　ヽ　路高

花の後草に暮行庵かな　丶　後菊
此花は誰がみとめてや胡蝶飛ぶ　丶水谷　嘉那
茶に遊ぶ人は桜の花香哉　丶　瓦三
初ざくら朝日こぼるゝ木の間哉　丶　海帋
月花の世をいとふてや山ざくら　丶松本　歌拙
道したふ道はあかるし花の陰　丶国己　其跡
山里や名のみ残せし散さくら　石州大森　臥山
見る人も其日のぬしや山ざくら　丶　鳴泉
谷川や又流れ来る花の枝　丶日原三好　義宣

（三六ウ）

花の陰や再び逢し温泉友達　作州弓削　白亀

花とけふ化して千鳥と成にけり　丶　孤山

はゞからぬ道の狭さよ花最中　丶　市仙

桜田の井塞所か花の瀧　丶海田　鶴友

岩橋や花の下道かけわける　丶倉敷　其綾

夕山や屯崩るゝさくら人　丶　冨雪

　獦子鳥のおびたゞしく集るに

さくら／＼群なく花の嵐山　丶　井角

紙燭さして梢見せうぞ初桜　丹波亀山　全瓦
羽二重に摺てなまめく桜哉　丶女　芝蘭
白雲の上代めきしさくら哉　丶牛河内　東畦
真の花に腹の拙き坊主かな　丶梶原　洞仝
飛／＼の花にも山はさくらかな　丹後　木越
花に溺れ花を忘れつ夕太鼓　丹波黒井　白雉
薄暮や俯向く顔に桜ちる　但州夏梅村　湖月
浦山の花吹込や磯の船　丶　桂月

蒼空にうつるや峰の八重桜　丶　素月

石竈をいくつ並べて山ざくら　丶　兎月

手をうてば鳥驚きぬ花の山　丶　沙月

咲たはと思へば花に入日かな　丶　瓢舟

若草も酒くさう成て花の本　丶舟谷　五雁

花折て裏道通る女かな　丶和田　龍山

花とはな重なる中や日の転ぶ　丶生野　白窟

酔ざめや手折し花にいかにせん　丶　文眠

東山花に二挺の皷哉　丶　涼秀

人去て月をするゐたる桜哉　備前岡山　幽雅
花守の偽らしき眼鏡かな　備中笠岡　文里
初ざくら命の欲もいや増る　備後田房　古声
痩るとも花にいとはぬ骸哉　〃福山　一声
初雷の響も遠し花曇　〃布野　瓢風
倦ながら花を寝言や雨の夜半　〃三渕　楚雲
鉄鉢で酒のんでみん山ざくら　〃布野　魚一
物さびて苔井に花の曇哉　府中　青甫

分入ば日も有なしや山ざくら　丶　梨英
花といへば恋も無常も籠けり　丶新市　雪馬
ちる花にすました面や雨蛙　丶福山　調呂
ふみまよひよき友得たり花の山　丶　笑種
牛飼の花折捨るいとまかな　丶　李朝

花の酔さめても宿る花の下　丶府中　柳芽
つむや句帳の数しげき春　丶　可卜
鴎眠る未過けんあたゝかに　丶　明々

蔀上れば船の来る見ゆ　〃　虎白
月二夜身はさむしろの露重き　〃　冬芽
野陣解て野菊みだるゝ　〃　青甫
庭の桜たゞ一もとに咲にけり　〃三原　梨陰
睦月より桜を思ひ初にけり　〃　土芝
遠近の人遠近の桜かな　〃　一之
市中に大かた八重の桜哉　〃　何笠

伐木からこぼるゝ花の莟哉　芸州小方　可友
居る雁も花見ぬ鳥といはれけり　ヽ広島　古江
表には垣してみへぬ山ざくら　ヽ竹原　大椿
名にしおふ桜の一樹みつの道　ヽ川尻　梧川
乗捨る駒も野飼や遅桜　ヽ呉　帰爪
夕山や手の凹飯にちる桜　ヽ御手洗　芦丹
侘住とおもへど花の夜明哉　ヽ　竹由
見入ては花に食事を忘けり　ヽ川尻　金竟

此家はどの落人ぞさくら花　防州室　仙家
かへり路や里迄つゞく桜人　丶　石父
うつかりと宿出て夜の桜哉　千亭
来た路にうかるゝ花の戻り哉　丶　思蕘
花につゞく菅笠ちさし遠の人　丶　とみ女
花に鳴をくれ烏や夕月夜　丶　鯨牙

夕山やさくらに遠き道一里　丶予州今路　巻玉
四五日は花に夜なき庵哉　丶　素雪

花守や人の来ぬ間を朝詠　丶　車南
あすもしれぬ花の命や散桜　丶　挹波
大名の花に暮けり夜の音　丶　李風
夜嵐や花に通へる人心　丶　羽戴
大空や花いく処花曇り　丶西条　潜龍
そよかゝる花に含や峰の松　丶　湖梅
蝶／＼は踏ともちらぬ桜哉　丶　得雨
就中智恵ある友よはつ桜　丶　楓梁
年／＼や花見に花の物語り　丶　斗龍

花の陰手向にたらぬ流かな　丶　其光
雪の根も笑ふ麓の桜哉　丶　杜夕
絶ぬ名や今に吾妻の初桜　丶　知柳
花の陰に花を畳むやかしは人　丶　桃洞
遅ざくら得しれぬ禿倉拝みけり　丶　梅里

曙や月の桜に風起る　長州赤間関　里山
釣簾の外山に放つ鶯　丶　万井
春雨の詩人をの／＼韻分て　丶

羃のこせる葛の太布　山
夕顔に翠の煙たち登り　丶
三四二家並ぶ里　井
宗旨まで替て多病の身を悔　丶
寝ぬ夜霰さら／＼と降　山
佐渡船の便求る出雲崎　井
酒を捧て過る瑞籬　山
強かりし胡の砦押破り　井
挿頭の紅葉日は斜なる　山

女房どち月の催ひに打こぞり　丶
をりゐの宮の憂をとふ秋　井
大原の麓に草の庵卜て　山
接木漸花をつけぬる　井
陽炎に地虫蠢く午時の鐘　山
笑顔長閑に雲母掻児　井

年／＼や花に朽なん老の節　丶　花休
鄙よ都よ愛あかぬ春　万井

百千鳥とりは百千に囀りて　丶
風に露散椽先の竹　休
朝月の影汲水の清らかに　丶
衣重ね行秋のたび人　井

雲去てうたがひもなし山桜　丶　浦雪
喜六を詰る我党の春　万井
貞室が琵琶に蛙や合すらん　丶
麦ゐまし置いさら井の水　雪

暮かゝる月に筵を畳みあげ　丶

すまひをまねぶ弟兄の児　井

分入れば花の衣手露匂ふ　丶　路明

ぬる蝶起す草の曙　万井

種馬の土に背を摺春ふりて　丶

細腰ながら旅の歌人　明

繰舟のたまりに移る月の影　丶

荻の初穂の真白成けり　井

我庵や月に嘯く花一夜　　喜慶

隣なき身の静なる春　　万井

告天子啼野末遥に小雨して　　ヽ

八重雲起る峰の風越　　慶

納涼川棹さし廻る夕暮に　　ヽ

薄柿白く見ゆる帷子　　井

花に来て今様うたふ美人哉　　花暁

鵤鴣斑匂ふ袖の永き日　万井

窓を打春の点滴濃かに　丶

二ふりながらよき剱也　暁

玉盌の酒に照添ふ秋の月　丶

紅き楓をうつす白紙　井

散花や夕近づく島つ鳥　赤間関　南菓

登帆や明石過れば須磨の花　羅風

花や雲影すむ水の朝ぼらけ　少年　梅童

花守とみへて白髪の夫婦哉　錦翠

船寒し花白妙に明にけり　指月

麦飯に桜散込舎り哉　里江

丙辰の春、花供養の日、赤馬関の
僑居月窓亭に社友を会して
如上の手向をなし奉れる
まゝを、つばらに写て洛東の祖堂に
送りて、いさゝか道の恩に酬ふ

桜咲てあまんの花は土の如し　万井

日斜や花に幸ます片山家　長州舟木　梅梢

乗捨し駒の居眠る桜かな　丶　芦舟
藻塩たく煙につゞく桜哉　丶　子文
しん／＼と経の声あり花の奥　丶　露濃
峰のさくら人去ぬれば雲覆ふ　丶　梅月
足る事をしらぬ花見の戻哉　丶アサ　羽翔
借し駕篭や花の麓に日もすがら　丶　文尚
日／＼に新なる花見心かな　丶子風改　寛雅
栗鼠登る九輪に花のふゞき哉　赤馬関　花暁

暁の花にかへるや花のゆめ　防州山口　湖流
我罪もあへなく散ぬ遅桜　〃　如水
落る日や見返る花に鐘沈む　〃　流志
見残した跡に鳥の桜哉　〃　菱波
よしや日のくるゝはなけの花衣　〃　舎州
ちる花にしづ心なき田打哉　〃小郡　桃林
行暮しまゝに有明さくら哉　〃　李暁
酔醒に谷水うまし山桜　〃　霞夕
かぎりなき春と詠けり桜花　〃　花卜

心をもいためる花の盛哉　ヽ　李洞

右左花の中なる不動かな　ヽ岐波　羽仙

桜咲て牛に跨る世成けり　ヽ小郡　春郷

夕づくやあだに野山の桜散　ヽ　和道

桜さく中より朱の鳥居哉　ヽ　松下

雲の前霞の後さくら咲　ヽ三田尻　嘯月

江の花や波間に雨後の月動く　ヽ山口　蘭台

花色／＼人の心に移る哉　ヽ　天民

世に遠き彼岸桜や藪の中　讃州笠居　芝峰

花ざかり世上に外の噂なし　ヽ引田　如竹

いつしかに杖もたはまん花の下　ヽ垂水村　帯雪

ちればこそ清し桜の此夕　ヽ高松　吐鳥

花の色は蝶にうつろふ盛哉　阿州西分　羽角

覆れん友や翁の花ごろも　豊前権田　有隣

大和路や花に惟然が拾ひ履き　筑前直方　此原

かきよする岩間の花や散惜み　ヽ　五雪

なまめきし道恐しや花の山　丶　苔水
花の風情己を夜に帰す哉　丶　元二
花に住て山鳩花に謟らはす　丶　遠子
夕煙雲にとゞかん花の星　丶　雲里
色／＼の鳥の音聞や花の中　丶　嵐之
折桜風なくて家に入にけり　丶　曙川
花降て斧を置たる男かな　丶　鳥川
鉄棒や花の脇道過る音　丶　橋雨
散初る花や六日の月の隈　丶　寄木

花の雨髻にしむや嵐山　丶　桃雫

花守や人にとぼしき一枚戸　丶　君花

いかばかり吹とや花の濁川　風羅堂下　芳杉

花守や寝る間も惜と茶に遊ぶ　丶　文推

あらけなや花に飛込山がらす　丶　吾涼

腸をうごかす花のあらし哉　丶直方　一萍

米搗も羽織着て出る花見哉　丶飯塚　芝尓

筆の軸かみわる音や散桜　丶甘木　布館

立よりて吉野ゝ花に筆乾く　ヽ木屋瀬宿　友尾

牛によりて眠る人あり花の陰　ヽ福岡　汀化

遠山や心にうごく初ざくら　ヽ　柳鄙女

三芳野や花の木の間の雲と水　ヽ　野陽

花盗人そもなまめける男哉　ヽ　紙白

ほころびよ月の夜すがら花の山　ヽ黒崎　まつと

朝夕は霞ても見せつ山桜　ヽ若宮　蘭澄

遠山や花にふくめる朝煙　ヽ直方　可角

法橋が花見や袖の飼鼠　ヽ　り梅

（四九オ）

うつりけり桜が本の人の声　丶木屋瀬　木耳

花の雪我もとゆひにかゝる哉　豊前小倉　南明

鍛冶があと有明桜老にけり　丶　不成

雲にむせて花見心の細き哉　丶　素流

花廻り訪ふ人たらで帰けり　丶　夏夕

咲さくら此外は何を欲にせん　肥前島原　陀雲

尓時からは乞食も来ぬ花の山　丶佐賀　涛明

【校異】某家本は四十九（柱刻）の一丁分が落丁している。

新鞍やことしの花に置初ん　丶有田　芦風
蒟蒻で僧をもてなす花見哉　丶　雪巵
瀧しづか花のひら／＼落にけり　丶　波声
花の山松もゆかしきふとり哉　丶　尹子
おもひ入るうつゝの暮や花の山　丶神代　通鮮
按摩医に花の難所を語けり　丶　二扇
白雲の中や一すぢ花の道　丶長崎　半古
盗人と名乗て折ぬ花一枝　丶　素人
夜部迄の桜はたゞに雪と降　丶　菊翁

のがれてし世にも桜の折戸哉　丶　季明
陵や花にふりぬる世がたらひ　丶　樗年
おもひなげに臥り桜の深山人　丶　杜陵
山の井に釣瓶かけたり花の時　丶　祥禾
日の筋や散かゝる花に鵤鵠の飛　丶　古琴

漣にさくら流るゝやよひかな　丶神代　仙鳥
花の色にうつろふて日も遅哉　丶　呂柏
おもはずも立よる花のくず家哉　丶女　柳枝

ちる桜ふもとの人はみへぬかな　丶　文袋
江の花や舟さすおのこ酒くさし　丶　魯盎
明日ありと母はいふ也夜のはな　丶　完雅
花の枝にあやにくに啼烏哉　丶　梨水
雲と見る日は長閑也山ざくら　丶　雪湖
蝶鳥の心になつて花見かな　丶　兎丈
呼子鳥春は桜にすむものか　丶　春喬
うたてやな鳥とる鳥の花に来る　肥後八代　文暁

花守よ雨に訪ひしは誰／＼ぞ　ヽ熊本　潭月
漕出て樹々を尋ん湖の花　ヽ　亀令
鐘遠く雲動けり夕桜　豊後岡　笛躬
其匂ひ今に聞日や花供養　ヽ夷　比竹
開帳も日延の札や遅ざくら　ヽ高田　山離
酒盛もみだれぬ浅黄桜かな　ヽ　壺月
類なや木の芽の食に山の花　肥前　薫路
雲晴てしばしは花の朝じめり　ヽ　和十
山ざくら狩入はては斧の音　ヽ　路文

山ざくら立交る木は鳥の糞　ヽ　羽雪

かゝる代や鬼が巌も花の雲　ヽ　斯長

花近し春風ゆらぐ杉のさき　ヽ　芦泉

雲焼の夜に引したふ花の奥　ヽ　静風

宵の雨しほるゝ花のあるじ哉　ヽ　壺外

　朝鮮和館よりの便に

朝鮮の花も供養のひとつ哉　対州　孚湫

花に精なきや此木の幾千とせ　薩州阿久根　朝瓜

岩渕や影澄花の朝ぼらけ　ヽ　机翠

雲散て花となるらん朝朗　日向美々津　吟龍

まゝならば世に隠れたし花の山　肥前諫早　楳江

花の夢さめてもやはり花の陰　〃　停花

緋衣に花の雫や花供養　〃　霞紅

ちる花を祈とゞめよ山法師　〃　夏蓼

主は誰そ桜がもとの樽一荷　〃　楳枝

浦山し花の中なる独住　〃　ゐつ

駒とめて水飼ふ花の流哉　〃　桃扃

山ざくら分別ありて折にけり　丶　遊鹿
後向まへむく花の入江哉　丶　一興
初花にことしも命延る哉　丶　春芦
人知れぬ花に弦なき琵琶も哉　丶　灃波

花に来て花と成身の安さ哉　丶　孤石
磯山や鷲の羽音に散桜　丶　輝白
月影の桜に曇る山辺哉　丶　雨夕
仮植のさくら／＼に莟み哉　丶　梅路

散る竹の中に虎の尾桜哉　丶　都友
花の風枕屏風をとられたり　丶　芳笠
ちりかゝる桜に扇ひろげたり　丶　瀧吹
山城や煙の中の夕ざくら　丶　文塘

菊大夫庵になひけり花の山　行脚　北華
花に競ふ人の中よりちる桜　丶　甫尺
憂人の夜見ぬ桜さきにけり　丶　五芳
鳥と共に人間くゞる桜哉　丶　一茶坊

要ぬかん風もいとはる花の陰　丶　花縣

静さに堪たり花のゆふ間澄　勢州山田木枯庵　丘高
入聟の花出やすき寺院哉　丶　不及
花咲て二日そろはぬ天気哉　丶　後水
傘張が日和も花の日和哉　筑前蘆江　宇策
散花の影澄月の桂哉　丶　白志
遅ざくら盛に咲て月丸し　丶朝三改　何言
花守やくりごと申明の雨　丶　希玉

一枝はゆるせ孝子が花好み　丶　南枝

住ごゝろ花の里なる昼寝哉　能州輪島　半苣

日もすがらそみつゝ月の桜哉　但州大屋　西郭

一さとは皆花守の子孫かや

霞に遊ぶ鶴の横平　伏見　あし丸

銅雀も弥生の山に連りて　楳価

削り立たる木の匂ふ也　錦圃

をのづから銭もたくみし月の客　金兎

穢多が入江の芦も散比　価
何となう風吹音の空闌て　丸
心ひかるゝ古郷の文　兎
吉原に敵としらず膝を組　圃
曇がちなる此二三日　丸
贈り来し歌を葬参する　価
竹に乱るゝ竹の釣草　圃
すべらぎの跡尋れば冬枯て　兎
人なく月の冴渡るかも　圃

狛犬の又もゆがみしほの／＼に　丸
　浦の帆船のちとも動かず　兎
奥の雨越シの小雨に吉野笠　価
　桃青堂の門つゞる朝　執筆

歳／＼に俤残るさくら哉　金兎
物いはぬ花ぞ尊しあみだ坊　あし丸
大名も花に端居や中の町　錦圃
枯魚も花に儲の庵かな　楳価

山ざくらあのくぼだいの出家哉　杜多　真菅

又一羽鳥あらはれて桜ちる　備中倉敷　玉井

夕煙ひと木の浅黄ざくら哉　丶　寄人

夜ざくらや蝶のさまよふ琴の上　浪花　芦村

雨ふるふ鳥に花散梢かな　城南　貞雅

人去て水の音あり山ざくら　西湖東万木　紅葉

白瀧や何れのをより散桜　常州水戸　真向

朝ざくら心澄たるつれひとり　伏見　磯水

夜は夜とて花の雲たつや桂川　　斑鳩

朝ざくらうき世がましき庵哉　粟津　重厚

水音や夜散る花に峰の月　山城八幡　斗流

花に来て山の入札する人か　ヽ醍醐　百哺

人の情はやきになづめ山ざくら　ヽ八幡　古律

花に酔て石を枕す麓哉　ヽ宇治　梁園

緋ざくらや加持する寺の夕日さし　ヽ飯岡　戸口

颱や一ふき花の雪を解く　ヽ天神森　平水

土産に花の芳野を見る日哉　丶八幡　李風
像前や紫ならぬ花の雲　丶　白我
螺の音や又一しきり花の雪　丶大住　鋤月
関守に隔られたる桜哉　丶サカ　峨乙
七曲りまがりて花のふゞき哉　丶長池　花月
晴兼る空に花散噂哉　丶天神森　雨林
散花に湯上りの身の赤さ哉　丶大住　子迺
ゆふ花に我もすこしと呼子鳥　丶野尻　魯長
夜ざくらや世をすねものゝ顔に散　丶天神森　五牛

（五六ウ）

北山や花をうしろに家五軒　ヤハタ　巴水
花の陰静りて夜と成にけり　〻　文瓜
花ちるや海へ嵐の曇り行　〻　亀洞

ぬけ道をすれば初花咲にけり　江州堅田　歌雄
暮かゝる空より花の薄白し　〻　籬邑
吹上て花なきかたの花曇　〻深川　梅二
花を出てむかひ待けり山桜　豊前権田　蘭丈
羽織着し酒盗人や花の山　洛　良涼

武士の刀みじかしさくら狩　湖東八幡　芳志
水ふくむ尾上の花や朝曇　伏水　梅斜
咲初て若木の花の足くるし　在京若州　巴龍
花を見る人を見に出る在処哉　丶　和林
徒に見るも供養の花の因縁か　洛　嘯山
酒のあるかたへ動や花の雲　丶　斗雪
葛城の神は昼寝か花曇　丶　閑空
むれよるや花を供養のけふとてな　丶　都雀

散て後胸にうきけり花の情　〻　鬼薊

山間の水田にうつる桜かな　〻　方広

古き世に分入花の枝折哉　〻　芹水

花散し枝は日の澄あらし哉　〻　驢丹

花供養咲ものゝみな麗しき　〻　唇風

まだ咲ぬ塩竈桜こがれけり　〻　寒蓼

手向なば猶清からむ雨の花　〻　南涯

吹おろす嵐も白きさくら哉　〻　松翁

花の駒月の鼠のおもひ哉　丶　偃武
仙境は尋ぬべからず花の山　丶　江蓼
花咲ぬ水も色みし谷の苔　丶　芦翁
桜より乱れ／＼て人憎し　丶　車莫
誉る中に散行彼岸桜哉　丶　以夢
山桜一日はあらじ忍びたり　丶　其龍
みだれんとしてさゝ曇桜かな　丶　原水
花を踏で紙屑拾ふ乞食哉　丶　伴水
幕串になすてふ花に虻の声　岡崎素柳改　樗山

供養なり花の仏にあらし山　洛　桃李
日帰や霞のはての山桜　丶　泰渓
花に来て庵の普請の差図哉　丶　長道
山里や家もろともに花の雪　丶　二雷
花を出て挑灯ともすゆふべ哉　丶　壺山
初花や腰かける石の際　丶　虎白
見あてたり花の栞の結ひ心　丶　一蕘
おくれ来て葉桜の陰花の情　丶　李明

木隠れて誰やらゆするさくら哉　丶　あふひ

人顔の朧にくれて桜散　丶　丈左

うき春も花を心の行ゑ哉　丶　月峰

さくら／＼とばかり春のかぎり迄　丶　以外

白妙やさくらにつもる人心　丶　九山

花に風されど共弥生なかば哉　丶　凡二

捻付し枝にも花のながめ哉　丶　雀頂

申されぬ天のゆらぎや朝桜　丶　止履

門のうち外もゆかしきさくら哉　〃　在貫
花散て翁の寝覚訪れけり　〃　可童
花の下にはきためられし芥哉　〃尼　俚尤
花の香やふりし頭の雪ならで　〃柿園　青鯉

帰るさや夜の花見る人に逢　洛　嵐桂
妻もたぬ身の上安き花見哉　〃　露台
花守に道尋ねけり薄月夜　〃　隆泉
言伝を文にそへけり花の頃　〃　里楽

あたら花筏へ散らす嵐哉　丶　嵐石
花の嵐美人と見しは隠たり　丶　松河
見る人に影のそひけり雨の花　丶　鸞台

句となして遠きより来ぬ花の匂　丶　百池
下駄はいてのぼる端山の桜哉　丶　志諺
花に染心しづむか泣上戸　丶　羅外
骨も身も代々に桜の翁かな　丶　応美
一筋に道定りぬ花の中　丶　不犲

雨の日も花にいづるか桑門　丶　兎夕
彼岸とて乞食すはれる花の陰　丶　玉牙
誰酔てもどりし跡や散桜　丶　松琶
ちる花を放下が蓙に畳けり　丶　南来
いそがしや花見る席に小雨降　丶　草美
花によるやゆたのたゆたのうかれ人　丶　木貞
土産の花香に満る住居哉　丶　黒樹
又たぐひ桜に月の面かな　丶　光暁
夕暮はちるよりかなし山桜　丶　墨古

清水にて

誰が扇さくらに落す舞台哉　丶白黛

さくら／＼山見ぬこゝろ又違ふ　丶沙長

いそがしき命よ花の一七日　丶土卯

雨添も花しづかなり嵐山　丶芦涯

花咲や嵯峨野に霞土ぼこり　丶紫水

立傘に駅路の桜散にけり　丶杜桂

花にはなの散かゝる山の姿哉　丶松蒼

朝桜末頼しき日数かな　丶尼　得終

さくら見るこゝろ叱るぞ市の人　丶　米駒
花に雨たまに女房の出る日哉　丶　漢水
雨の花うしや美人の骨を打　丶　忘江
知る人を覗き歩行し花見哉　丶　渡牛
一日のぬしとみえけり花の本　丶　路月
ちる花に地を匍匐童二人哉　丶　竿嗜
みよしのゝ旅人も戻れ花供養　丶　其成
花曇紙に蚕の命かな　雲和改　木葉
散がてや一重桜の近まさり　闌更

祖翁百回忌追善俳諧　　豊前小倉

旅人と我名呼れんはつ時雨　翁
　いく霜むすぶ簗の古道　渭水
西南の山松風に門さして　夏夕
　色よき柿を縄につらぬる　素流
かたわれの月に車をおりたてば　不成
　水の上にも虫の音を鳴　南明
うみ苧する桶に昔の忍ばれて　水

かいはいはみな腹あしき人　夕
桑の木に結び付たるつり狐　流
星は夜明のむら雲に入る　成
うたかたとなり行恋の痩からだ　明
火打ぶくろを贈る別路　水
鯨取つくしは人の頑に　夕
からかみうたふ月の小社　流
蓑の毛の細きを風の吹通し　成
みなしごといふ草とひに行　明

山陰の花見法師と聞へたり　水
窓さしのぞくきさらぎの末　夕
蛤をにじる湯町の裏通り　流
夕陽あかく鵜鳴なり　成
ふじ染の着ならし衣手を組て　明
妻にあはじと思ひさだめり　水
酒に身をきのふは駿河けふは伊豆　夕
四月は夢のあとなかりけり　流
高杯に残のともし打けちて　成

供御とりちらしみな船に乗　明

楢柴や葉分の風の吹からに　水

病鹿の来るひはり戸の本　夕

月よしと枕につくる青つゞら　流

死をくれたる露の命ぞ　成

円物のあそび三度の御使　明

波しづまつて谷／＼の鐘　水

笹蟹の空にすがける糸張て　夕

見入のあさき家にすくも焚　流

桧木笠花は白きをうつろはず　成
春の心の今もおなじく　明
手向
月やあらぬ松は昔を時雨けり　南明
遠き世の今宵や霜に心澄　不成
したふむかし霜の梢を月と花　素流
鳴鵆ふるきをしたふ浦の波　夏夕
見ぬ世したふ蝦夷やうるまや松の霜　渭水

一時雨あとからも来て冬の月　花明
世は永離ひとり今宵の月寒し　菊露

右

遅来

花か雲か妻木樵る男に物申　洛　未物
笠ぬいで娘のひろふ花見かな　肥前平戸月岬改　竹渓
けふの雨花は曇もなかりけり　信州飯田　蘭二
すでに花の時来るけふの盛哉　洛　都水
暮行や花の末なる雪白し　加州　朶山

咲花や園の詠の絶間なき　ヽ　栢舟

親しみの友訪ふ日あり山桜　ヽ　雅松

誘はれて見ぬ初花の朝気哉　ヽ　一馬

桜咲ほこり立日の最中哉　能州輪島　李席

世の中やうとき人には遅桜　勢州白子　宇兆

　洛のはせを堂を思ひ出て

咲花に夜は包まるゝ庵かな　信州飯田　蕉雨

夜の桜さくらは闇を埋みけり　ヽ　壺伯

花物をいはねど庵の往来哉　備中倉敷　無涯

洛東　芭蕉堂蔵板

（裏表紙見返し）

（裏表紙）